

これぞ 安芸陸の力 最後の中国大会で感動実現！！

第76回中国高等学校陸上競技対校選手権大会

今年5月6月16～18日
シティライトスタジアム

性	種目	名前	学年	記録	風力	順位	備考	天候
男	ハンマー投	竹下 永晃	3	57m14		決2	自己新	晴れ
男	槍投	竹下 永晃	3	47m73		決15		晴れ
女	ハンマー投	島津 純葉	3	44m92		決3		晴れ

インターハイ路線の戦いは勝ち上がりの戦い。島津と竹下は、魔物との戦いも経験した県総体を勝ち上がり、安芸陸最後の中国大会を迎えた。感動のシーズンを全うするためにはここを通過していかなければならない。安芸陸の中国大会での戦いは平成18年から17回連続（令和2年度は中止）となる。昨年度までの戦いでは出場74種目中38種目でインターハイ出場を決めている。中国大会での成功を「インターハイ出場決定！」とするならば、5割を超える成功率となる。

島津と竹下は中学校時代に安芸陸を知り、安芸陸に憧れ、覚悟を決めて安芸陸の一員となった。入学後、様々な経験をする中で心身共に成長し、インターハイ出場以上のレベルまで実力を高めて中国大会に臨む。安芸陸最後の中国大会を島津と竹下と戦えることを幸せに思う。安芸陸を、自分を、信じて戦おう。

男子ハンマー投、竹下が先陣を切った。大会前には「早く試合がしたい。」と言うほど自信の持てる状態をキープしていた。試合に入り、1投目に55mを超えてインターハイ切符をほぼ手中に収めた。これで安心することなく2投目には57m14の自己新を投じた。その後も攻め続けて次のレベルの感触も手に入れた。今年の中国地区男子ハンマー投は、インターハイ優勝候補を筆頭に入賞可能レベルの記録を持つ選手が4名もいる過去にないハイレベルの戦いであった。試合前には「中国大会はインターハイ」と位置付けて全国の戦いを意識させていたが、その中で混戦の2位争いを勝ち抜き、準優勝となった。堂々とした試合だった。おめでとう！

『インターハイで60m！』その目標に向けて技術的な課題はいくつかあるが、本気の心が技を変えてくれる。やるしかない！ 自分を変えろ！



竹下がチームに勢いをつけた。男子に続けて行われた女子ハンマー投、島津が竹下の結果を聞き「自分もできる」と確信を持って臨むことができた。島津は大会前にはどうしても不安の気持ちが先行していたが、本番が近づくにつれて自信が勝る状態になっていった。安芸陸を信じることで自分を信じる事が出来た。試合会場に入るとヘッドとの関係性、ハンマーと仲良くすることだけ考えて動いていた。1投目に44m台の記録。4位以内でインターハイを決めるための最低限の条件は整えた。勝負はここから。今年の中国地区女子ハンマー投は、インターハイ出場権をかけて大混戦が予想されていた。記録的なラインと思われる45m越えの可能性がある選手が5～6名いる。1投目が終わった時点で島津は4位。大会前のランキングトップの選手は失敗投擲だったのでこれから上位に上げていこう。島津は2投目・3投目と投げは良かったが、記録をアップさせることは出来なかった。だが、ベスト8には4位で通過することになった。ランキングトップの選手が本来の力を発揮出来ず、エイトに残れなかったからだ。ちょっとしたタイミングの違いで結果が大きく左右される・・・ハンマー投の怖さである・・・この試合、島津は安芸陸を、自分を、そしてハンマーを信じることが出来た。4投目、張りを感じ下へ力を加え続けることだけに集中し、45m付近まで運んだ。記録は44m92。6cm差で3位に浮上した。勝利の女神が微笑んでくれた。その後、順位は変わらず3位で競技終了。インターハイを決めた！良い試合だった。やったぜ！ おめでとう！！

県総体前、中国大会前、何度も魔物に苦しめられた島津だが、最後は勝利の女神が現れた。信じる力が結果を創ったのだと思う。3位の表彰台、最高の笑顔だった。この笑顔をインターハイでも見たい。北海道には昨年の鳴本先輩の忘れ物もある。今、本気で、一気に『全国の心』になる！ 自分を進めていこう！



今を知った 今から創る！

第77回広島県陸上競技選手権大会

今年5月6月24日
広島スタジアム

性	種目	名前	学年	記録	風力	順位	備考	天候
男	一般ハンマー投	竹下 永晃	3	46m87		決3	自己新	晴れ
女	ハンマー投	島津 純葉	3	42m54		決3		晴れ

理想の投げを求めた中国選手権

永晃、最後にまとめて一般ベスト

純葉、惜しかった 表彰台に立ちたかった

第77回中国陸上競技選手権大会

令和5年8月19～20日
布勢運動公園陸上競技場

性	種目	名前	学年	記録	風力	順位	備考	天候
男	一般ハンマー投	竹下 永晃	3	48m00		決7	自己新	晴れ
女	ハンマー投	島津 純葉	3	44m42		決4		晴れ

インターハイを終え、ラスト二試合となった安芸陸。上の大会につながるものがない試合に臨むにあたり、練習でのテーマを『理想の投げ』とした。競技としてハンマー投が出来る時間もあと僅か、これまでの取り組みを通して築いた自分の理想とする投げを求めて実際に表現したい。それが試合の場面で出せれば、インターハイでの失敗を成長へと変換した証になる。

最後の県外遠征試合となる中国選手権が厳しい残暑の中、鳥取で行われた。高校用より1.26kg重い一般用ハンマーに挑戦した竹下は前半から力の出し入れに苦しみ、なかなか思うような投げが出来なかった。何とかエイトに残ったが、4・5投目も空回り。どうしても脱力が表現できない。気持ちを切り替えた最終6投目は脱力による張りが最後まで見られ、記録と順位を上げて試合を終えた。もっと早くこの感覚を表現したかった。県対抗ではもっと伸び伸びと自分の投げを表現しよう。ハンマーを楽しもう。

この遠征では現在日本の女子ハンマー投界においてトップレベルで戦っている九州共立大学の勝治先輩と行動を共にしていた。島津は勝治先輩をはじめ実力では格上の選手に交じって試合をすることになった。その意味では順位を気にせず自分の投げに集中することが出来る。最初からインターハイ時のように自分の癖で自ら崩れることはなく、安定した投げを繰り返していた。ただ、勢いが足りなかった。その勢いを動き始めて作るのではなく、最初の面づくり（振り子→スイング）を工夫することで安心してどっしりした姿勢をつくりたい。それが5投目に表現できた。大きく記録を伸ばし、順位は7位から一気に4位に上げた。3位までは僅か24cm。この感じであれば最終6投目に表彰台への逆転劇もある。しかし、1回転目から2回転目に自分から動き、バランスを崩した。残念・・・勝治先輩との最後の試合、共に表彰台に立ちたかった・・・5投目も理想の投げとは言えない。記録的にも自己記録は更新できていない。ラストゲームは一週間後。誰のものでもない、島津自身の自信の投げを求めていこう。

あと一週間。二人にとっても安芸陸にとっても最後の試合に向け、『理想の投げ』を求めていこう。

有終完美 ～感動のラストシーン～

第73回広島県高等学校対抗陸上競技選手権大会

令和5年8月26～27日
竹ヶ端運動公園陸上競技場

性	種目	名前	学年	記録	風力	順位	備考	天候
男	ハンマー投	竹下 永晃	3	56m33		決2		晴れ
男	槍投	竹下 永晃	3	53m56		決1	自己新	晴れ
女	円盤投	島津 純葉	3	24m30		決11		晴れ
女	ハンマー投	島津 純葉	3	45m76		決1	自己新	晴れ

男子フィールドの部 第5位〔15点〕

島津と竹下の二人にとっても、安芸陸にとっても最後となる県対抗。初日は二人の専門種目であるハンマー投。最後まで指の痛みと付き合いながらハンマー投を終える竹下は最後の練習でも思い切り力をかけることが出来ずもどかしい気持ちで試合に臨むことになった。試合は2投フェールからの展開となりヒヤリとしたが、後半は落ち着いてハンマーと向き合い自分の表現ができた。ライバルとの競り合いも楽しいと感じられる試合ができた。島津も2投目まで途中で動きが途切れてしまう悪いクセが出ていた。このままでは終われない。自分と向き合い気持ちを切り替えた。3投目からは強い気持ちで攻める投げが出来た。僅かではあるが自己記録を更新して競技を終えた。最後の試合は二人の競技人生を象徴するような展開であったが、心の成長を証明する形で終わることが出来たと思う。二人にとってハンマー投は自分の心を映し出す鏡だったと思う。ハンマー投に成長させてもらった。ハンマー投に感謝。

いよいよ安芸陸ラストスローとなる二日目の男子槍投、竹下の投げを見届けようと多くの先輩達が駆けつけてくれた。1投目先制しトップに立ったが、途中ライバルに逆転される。最終6投目、安芸陸ラストスローは先輩たちの思いも乗せて大きな虹を描いた。大逆転優勝！最後の最後に竹下がやってくれた。先輩達も大喜び。感動のラストシーンとなった。まさにこれが『安芸陸の力』『終わりの力』だ。20年間をつなぐ一投は永遠に心に残る一投となった。安芸陸は永遠・・・



【安芸陸メッセージ】

安芸陸は永遠

令和5年8月27日、安芸陸は最後の戦いを終えた。最後までドラマチックな展開であった。

翌日、私は『大樹』を1号から163号まで読み返した。朝8時頃から読み始め、全てを読み終えたのは夕方17時を過ぎていた。改めて、20年という時間の長さ、安芸陸への思いの深さを実感した一日であった。

20年前の10月、陸上競技部通信第1号を書き始めるに当たり、題名は『大樹』しか浮かばなかった。「緑に囲まれた学校」「小さな苗木を植え、大きく育てていく活動方針」「一人一人が広く根を張り、強く太い幹から広く美しく枝を広げていく育成方針」「全国で存在感を示し、日本一を目指す競技目標」「勇壮な姿から発せられるメッセージ性」……

安芸高校に赴任してからの半年間は、私自身が目指す姿と現実の乖離に葛藤する日々であった。しかし、陸上競技への情熱は失せることはなかった。『大樹』を書き始めたのは、私が、私自身に強い覚悟を示すためだったのかも知れない。

『大樹』の号数が増えていく過程が、安芸陸の歴史となっていった。

『大樹』の主人公たちは、いつも私の心を熱くさせてくれた。『大樹』を書きながら、さらなる情熱が沸々と湧き上がってくる日々だった。

君たちと出会えたこと、ともに戦い、ともに成長できたこと、心から感謝したい。ありがとう。ありがとう。

ともに歓喜し、ともに涙した瞬間・瞬間…… 永遠の宝物だ。

安芸高校閉校に伴い、君たちがつないできてくれた安芸陸20年の歴史も幕を閉じることになった。安芸陸の戦いは過去のものになり、思い出として残っていく。しかし、安芸陸の魂は、私たちの心の中で永遠に生き続ける……

前途多難 卒業時に送った言葉だ。今現在、君たちは何をし、どのような生き方をしているのだろうか？ これからも、それぞれの人生には様々な状況が訪れるだろう。平穏なる時も、困難なる時も、常に未来を見据えて、今を生きていこう。

心に抱く希望と言う名の苗木、その苗木をそれぞれの大樹へと育てていく人生を生きていこう。

安芸陸は永遠……